

ヨーロッパ図書館紀行 ―イギリス・アイルランドから―

京都大学情報学研究科図書室 江上 敏 哲

海外の図書館のうち、イギリス・アイルランドからそのいくつかをご紹介します。

イギリスで最も大きな図書館がBritish Library（大英図書館）です。

1753年からの長い歴史を持つこの図書館には、総計1億5000万点もの本・資料が所蔵されており、しかも毎年300万点（本棚12km分）増えつづけているとのこと。京都大学全学の本・資料が約600万冊ですから、その半分づつが毎年増えていることになります。書写資料31万点、地図400万点、雑誌26万タイトル。マグナ・カルタ、レオナルド・ダ・ヴィンチのノート、グーテンベルグ聖書から、ビートルズの楽譜・音源まで、多種多様な資料が収められています。

1998年に現在の場所St.Pancras地区に建てられた新館では、従来型のリーディング・ルームー研究目的の利用者のみが入室でき、資料はカウンターで請求して、書庫から取り出されてくるのを待つだけでなく、誰でもが自由に入ることのできるパブリック・エリアにたくさんのスペースがあてがわれています。数々のコレクションを展示する常設展示・企画展示のほか、印刷出版の歴史を体験することのできる児童・生徒向けの教育プログラム用展示室や、古典籍のデジタル画像をブラウジングすることのできる端末コーナーなど。定まった展示室だけでなく、館内のあちらこちらに、貴重な資料や模型をディスプレイしたステージやショーケースが並んでいます。これらは研究目的ではない、一般市民のために公開されているものです。もともと大英図書館は大英博物館の一部であり、現在でも、資料を

自由に見ることのできない閉架式を採用しています。そのかわりに、このようなパブリック・エリアを広くとることによって、社会全体への還元という役割を果たそうとしているのです。

さて、このBritish Library新館の隣にあるSt.Pancras駅は、映画『ハリーポッター』のロケにも使用された歴史ある荘厳な建物です。その景観を壊さないための配慮として、British Library新館の前面部分が低く抑えられています。

次に、ロンドン大学のSOAS Library（The School of Oriental and African Studies：東洋アフリカ研究学院）をご紹介します。

ロンドン大学は夏目漱石の留学先でもあったところで、オックスフォード大・ケンブリッジ大にならぶイギリス第3の規模と歴史を誇る大学です。そのカレッジのひとつであるSOASは、アジア・アフリカ・オリエント地域の地域研究（area studies）を専門に行なう機関として、イギリス国内ばかりでなく、世界の中でも中心的地位にあります。ヨーロッパ以外からの留学生が全学生の30%以上を占めているところからも、その“地域研究の雄”としての姿がうかがえます。

そのような大学の図書館ですので、蔵書やサービスも非常に特徴的です。例えば日本研究のためのコレクションでは、日本の市町村で編纂された地方史出版物がとても充実しています。日本ヘフィールドワークへ行く予定のある研究者が、その下準備のために頻繁に利用するそうです。歴史的経緯から、中国やインドの資史料がもっとも

充実しており、場合によっては本国へ出向くよりも、この図書館のほうがとっとくばやく文献を収集できることもあるようです。

それほどに魅力あふれる地域研究資料を求めて、ヨーロッパ各地からたくさんの研究者が訪れます。彼（彼女）ら大学外の利用者に対応するため、さまざまな種類のメンバーシップ制度が用意されています。5日間無料、それ以上は1日単位の課金で、貸出はできないDay Membership。年間一括払いで貸出も可能なBorrowing Membership。企業研究者用の割高なMembership。推薦状で資格が得られる、古典籍資料専用のMembership、等。貴重かつ有用な資料を本当に必要としている人たちのため、その門戸を広く開いている図書館といえるでしょう。

続いては、ロンドンから鉄道で約90分、オックスフォードのオックスフォード大学を訪ねます。

意外に思われるかもしれませんが、イギリスをはじめヨーロッパ各国の図書館・コレクションには、相当数の日本の古典籍が所蔵されています。ここオックスフォード大学のBodleian Japanese Library（ボードリアン図書館附属日本研究図書館）には、イギリスの大学図書館でも最古の日本語書籍である、謡曲「やたてかも」「じねんこじ」「やしま」の3点が所蔵されています。1615年頃に日本で出版された観世流謡曲の嵯峨本で、1629年にRobert Vineyという人が寄贈した、との記録が残っています。この資料は、10数年前に来館した国会図書館の修復家によって修復され、他の古典籍資料とともにエアコンの効いた部屋に保存されています。遠い異国の地にあっても、丁寧に扱われ、恵まれた保存環境のもとで大切に保管されている様には、感慨深いものがあります。

最後に、アイルランド・ダブリンのChester

Beatty Library（チェスター・ビーティー・ライブラリー）をご紹介します。

Chester Beatty Libraryは、Alfred Chester Beatty卿（1875-1968）が収集したアジア・ヨーロッパ・イスラム世界の古典籍や美術品からなるコレクションで、図書館というよりもむしろ美術館・博物館としての性格が強いところです。日本の資料も数多く所蔵されており、特に奈良絵本（室町時代から江戸時代初期のおとぎ話等の本、色あざやかな挿絵が特徴的）については、British Library、New York Public Libraryと並び、海外では屈指のコレクションを有しています。

展示室には、浮世絵の印刷行程や、西洋の装飾文字のレタリング行程を、ビデオで見せるブースがあります。作業している手の動き等がさまざまなアングルからとらえられており、木を削る音やペン先の擦れる音もはっきりと収録されています。経典のブースでは、宗教儀式の映像や読経の音声が流れるなど、寺院や教会のような雰囲気再現されています。そのあまりの神聖さと心地よさに、数時間滞在する人も珍しくないそうです。単に資料を見るだけでなく、その資料の背景にある文化や世界観全体を、音や映像で体感できる工夫がなされている、というわけです。

このLibraryはかつて、ダブリン市郊外の、訪れるには多少不便な場所にありました。2000年、ダブリンの中心地であるダブリン城内に移転し、建物も一新。展示室のディスプレイやレイアウトも非常に見やすく、魅力的なものに姿を変えました。その甲斐あってか、かつて6000人程度であった年間来館者数が、移転後は7万人と10倍以上に増え、現在では15万人近くが訪れているとのこと。

（えがみ としのり）